

朝鮮地名の考説 (七、完)

中村 新太郎

六、生業に關する地名ノツミキ

ハ、林業及草木に關する地名

林

林のついた地名は少くない林川忠南扶餘はもと郡であつた。山林洞、石林洞、美林、岐林、巨林

松林、箕林等いくらでもある。但し林のついた所必ずしも伐木事業が行はれて居る處ではない、朝鮮には林野たるべき山地が甚だ廣く其の總面積は千五百八十八萬町歩あるにも拘らず濫伐と火田開墾の爲め荒廢して現在の成林地は五百四十八萬町に過ぎない。其の位置も江原道の脊梁山地や鴨綠豆滿兩江の僻陬にあつて其の他の處では一般に薪にも困る位である、激雨の多い朝鮮は毎年水害の爲めに困しめられる、之を救ふべき手段は殖林を措いて外にない。立派な森林をもつた幾多の林のついた地名が新たに出来ることを祈らずには居られない。

板

平北などの林のある地方にゆくと板洞ヌルコル、板子洞ノソツコル、列於洞ノルコル、板幕洞などがある、之等は板を産

する處である。

樹木の名のついた地名も多い。柳洞、柳木洞、柳田洞等の柳のついた處が少なくない。柳の木は朝鮮にはかなり多い。楊木洞もある。檜洞、又は會洞檜木洞又は峠の名として檜木峠などが高い山の奥まつた處にある。檜洞と云ふと灰洞と間違ひ易い。山地を除くと一般の樹木は松である。片麻岩の霏亂した赤土とまがりくねつた松木とは朝鮮の著しい景觀を作るものである。製材にしても乾くと拗れる松は家の材料となり、松葉は一般の焚物にされる。京城の様な大都會でも松葉を堆く積んだ牛をノソソと牽きながら都大路を行く松葉賣を見ぬ日はない、松葉の煙は嫋々と溫突の煙だしから朝に夕に棚引く。焚木のない朝鮮では松葉でも木と云ふ。松の附いた地名は中々多い。松田洞、松林里、松峴里、松川洞など擧げきれない。試みに平北泰川郡の洞名を通覽すると、全郡で八十二洞中松のついた地名が松貴洞、松谷洞、新松洞、松隅洞、松栢洞、松峴洞、松川洞、松南洞、松北洞の九つある、一割以上にも達してゐる。此等の外楓洞、樺洞、楸洞等がある。

草では桤洞がある、桤は萩である。蓬田洞、葛田洞、葛谷里がある。芦洞や芦谷洞は甚だ多い、蘆田は河畔にあつて收益の多いものである。製紙のバルブの原料にも試用されて居る。草坪は柴草の叢生地である。古沙里例、全北、古土里例、江原と云ふのは蕨のことであらう。現に上蕨里全北がある。

二、水産に關する地名

水産に關する地名は甚だ少ない、少くとも述者の知つて居るものは次の二三に過ぎない。

箭 は築である。江原杆城郡に長箭がある。捕鯨の中心になつて居る。昔から長い筈で漁魚した處であつたのであらう。平南龍岡郡に箭浦がある。大同江と載寧江との合流點に近い處で今では東津里と合併して東箭里となつた。咸南文川郡には箭灘がある。

方魚津 と云ふのが蔚山^{慶南}と清河^{慶北}とにある、共に漁場である。方魚は魴魚であつて内地の鱒^{ボリ}である。迎日灣附近は内地の漁夫も移住して居て鯨の漁場である。

慶興^{咸北}に黃魚浦がある。黃魚は鱣魚とも云ひ鱧^{ハナハ}のことである。鏡城^{咸北}漁郎面には漁大津の小港があり、其の東方の海角を漁郎端と云ふ。之等は漁業に關係のある地名であるが、漁波^{平南順安}は海に關係はなく農産地である。

鹽盆 は製鹽の大釜である。鏡城^{咸北}の海岸には鹽盆と云ふ小地名がある。

ホ、工業に關する地名

店 所 ^{チヨム} 店は工場である。商ひの店ではない。又支那の様に宿屋のことでもない。商ひ見世は塵で、宿舎なれば院である。店は昔は所と云つた様である。沙器店、沙器所は陶器製造場のある處で^{オンギ}瓮器店は土器を作るところである。沙器幕、瓮店などがある。笠店では笠を造り、鎗店は眞鎗細工

をする所である。紙所船所全南光陽がある。然し餅店黃海金川は餅を作る所ではなく、陶磁か金物を作つたところであらう。

瓦洞キリコル、瓦里などと云ふのは瓦を作る處である。

冶フルモツコル 冶谷や冶洞は所々にある、鍛冶屋の谷である。尤も小地名としてあるものは鍛冶屋が常に住

んでトンカチして居る谷の意義でない。朝鮮の田舎でよく見かける様に鍛冶屋は部落から部落へと農具の手入をして旅稼ぎをして歩く。ある部落の小澤の口にさゝやかな小屋掛けをして仕事をするさうした場所はいつも一定して居る。それは家からの距離や使ひ水を得る都合から定められたのである。かうして一年に一度か二度かまつた場所に陣取るので其の小谷に冶谷の名がつく。陝川北慶冶爐面に冶爐里がある。昔鐵を製鍊したところである。

竈又は釜 は日本と同じく訓はカマであるが竈谷には石灰爐があり炭釜洞スツカマは炭焼く谷である。

へ、鑛業及石類に關する地名

鑛業に因んだ地名は多いとは云へないが述者が朝鮮の鑛床を踏査した關係から割合に多くの事項を蒐集することが出來た。嘗て朝鮮鑛業會誌第一卷第二號に掲げた所を略述することにする。

金 音クム又はキム訓はシエーである。金と云ふ文字は好い字である。それ故金谷里金村里などはざらにあるが金のついた處必ずしも金に關係はない、金井は墓穴を掘る時境界をつける粹である

と云つた風で朝鮮は産金國であるから金のついた地名のある處には金が埋藏すると早合點してはならぬ。然し實際金溝金北や金坪里同や金昌城南や昔から砂金の産地であつた。

一方金谷シエーコルと云ふ小地名のある谷には鐵鑛を採掘した跡のあるのが多い。蓋し金は鐵である。

水鐵、鐵 水鐵里と云ふのが時にある。水鐵はスチョル又はムシエと云ひ銑鐵のことであるが、水鐵里には褐鐵鑛を産するのが常である。水鐵は寧ろ褐鐵鑛を意味すると考へられる。鐵店と云ふのは鐵を吹いた處である。黃鐵里城南がある。黃鐵は眞鍮のことであるが、黃鐵里と云ふのは黃鐵鑛を産するのであらう。又京城の北の碌礪峴には小さな黃鐵鑛が出て鮮人は山骨サンコルと稱して醫藥に用ふる。

銀 銀店、銀洞、發銀洞等の銀をつけた處には多く昔時の銀冶の跡がある。朝鮮では石金は昔掘られないで砂金が主に採られたが、銀の方は鑛脈や鑛塊をなす鑛床が古くから採掘された、其の或物は今では金銀鑛床と云へるものである。銀は實によく探究されてあつたと云へる。一方銀鑛床には方鉛鑛を伴ふのが常であるが又閃亜鉛鑛に富んだものもある。例へば端川の檢徳のものゝ如きである。

銅 銅店と云ふのは諸所に見受ける、銅冶であつて甲山城南の銅店には含銅率が平均一割にも達したよき品位の銅鑛床があつて先年久原鑛業會社で採掘製鍊した。厚昌北平の銅店にも著しい接觸鑛床

がある。然し銅鑛の存在の疑はしい銅店もある、三陟郡江原や楊平郡江原の銅店では銅鑛を製鍊した確證を獲ないが、よく探究すれば其の跡や銅鑛床を見出さないと限らぬ。

鉛 ヨシヨムコル 鉛店谷とは鉛銅谷と云ふ小地名がある。こんな谷にはきつと鉛や銀を採つた跡がある。鉛幕谷は江界平北にある。

黒石峴フクトルコグエトや土墨谷モクコルと云ふのに黒鉛や無焰炭がある。土狀黒鉛は昔から朝鮮人は糸線車の心棒に塗末して滑りをよくしたり、黒の染料にも用ひた様である。

一體朝鮮に限らず支那でもさうであるが、古く開けた土地柄で昔から用途のわかつて居た鑛物はよく探索された。地名に鑛産を示した様な鑛床はともかく其が採取されたことがあるもので、中には今でも有要なものがある。新しく用途がわかつた鑛物は勿論昔は採取されなかつたのではあるが其存在は知れて居た。金剛山江原のタングステン鑛根銀にした所で昔から瘡おこりの藥に用ひたと云ふし、瑞興海の亞鉛鑛にしても昔から爐甘石と稱して役には立たないでも文書に掲げられて居る程である。支那に鑛物を探索するものに取つては文献を涉獵にすることと地名の解説から鑛床の良否を定めることが捷徑である様にも感ぜられる。

金の條下で言ひ残したが、古い砂金産地には種々の傳説が残つて居るもので、厚昌平北の山奥で聞

いた話では鶏の腹中から金塊が出たので大きな倒れ木をとけて見た處其の下から枕程の塊金が露はれたとも云ふし、砂金に關する説話は甚だ多い。豊山^{南咸}の高原地である達阿峙^{タラチ}は砂金産地であるがタラチはタラッキ又はタレキの方言で畝で造つた手提げ籠である。一日採取に従事すると籠に一杯砂金が採れたからそこを達阿峙と名づける様になつたのだと老人から聞いた。

砥石^{スツシト}

谷^{コル}には砥石になる硅長岩^{フナライト}が出るが、この石は又碎粉して水簍すれば陶土が得られる。實際

砥石谷で陶土を取つて居る所が多い。朝鮮の陶器無論昔の高麗焼も硅長岩から其の原料を採つたのが多いのである。尤も朝鮮で現在最もよい高嶺土とされる河東^{慶南}のものは斜長岩^{アノルサイト}の分解物だとされて居る。

灰

谷や竈谷には石灰岩があつて石灰に焼かれる。硅石^{チャドルコケエ}峴には白色の石英脈がある。玉石谷^{オクトルコル}には

玉^{ぎよく}がある、海南玉と稱される蠟石の最も有名な産地は海南郡^{全南}の玉埋山である。こゝからは薄薔薇色の明礬石も出る。水晶谷には水晶が出る。

餘 録

本篇を綴りながら考へられたことは、地名の考説には小地名が面白くもあるし重要でもあると述べたにも係らず、一渉り朝鮮地名の概説を試みやうとした爲めにかなり大きな地名を取扱つたこと

になり了つた遺憾である。之と同時に研究の至らぬ爲めに述べやうとして言ひ残した事や、例に挙げた地名が適當でなかつたり、また外に多くの例があるのを見逃したりした。さう云へば地名につく言葉が無理に分類して甚だ叙述を窮屈なものとして面白い考説を入れ場所もないものとした。

瀬川^北の清川江畔に安突^{アンデル}と云ふ小地名がある、こゝで藤田組の手で一時金鑛を掘つて居た。アンタは抱くことである、安突は清川江畔が崖になつて居て通行するには岩崖に抱き付いて行かねばならぬことから附けられたのである。こんな風な言葉から付けられた然かも其が種々の借り字で表はされた地名を解釋して行くのでなければ地名考説たるに足りない。朝鮮の地名に鳳、興、月、慶、禮虎、鶴、寧などの字のついたのが多いのも其の大部は宛字であらうと思へる、一々の地名を眞實に且つうまく説明して行くにはまだまだ前途が遠い。

それにしても本篇を通覧された方は朝鮮地名の構成の一斑はよく理解されたことと聊か自ら慰められる。前にも述べた様に述者に取つては十数年の負荷をとにかくこれで下ろした様な氣がする。殊に幾人かの知己からは本篇に對して激勵の語を寄せられたし、猶ほ述者の不文なるが爲めに不明な記述をした箇所について注意される親切を示された。本誌第四卷第六號四八〇頁の灘の條下に「支那に於ける如く海の沖合でなくて、河中の浅い處の意義」でと書いたのは句讀の打ち方の悪かつたので多數の讀者の誤解を招いた。述者の地理學の先生は東京から「支那に於ける如く」は「日本に於け

る如く」の誤りならんと申越されていつも變らぬ指導を給はつた、大阪の知己からは大江河と題する楊子江の灘の寫眞が澤山這入つたを以て説明の書かれてある英文の冊子を寄贈された。述者はかうまで師情と友情とを示されたことに對して自分の不文を歎かずに居られない。先の一句は次の如くに改める。「海の沖合でなくて支那に於ける如く河中の淺い處」とする。述者に取つては餘技であるこの朝鮮地名の考説を氣輕な氣分で述べ始めたものが八箇月の後に地學愛好家の溫情で嬉しく且つ嚴肅に筆を收めることは豫期だもしなかつた賜である。

先覺の激獎に力を得て「朝鮮地名の考説」を補正する仕事にかゝるつもりである。そして考説を飾り且つ判り良くすべく寫眞や描圖を挿入して「地球ブックレット」の一篇として速く發行したいと思ふ。

(完)

○本冬の初雪

初 日		昨年比較	平年比較	初 日		昨年比較	平年比較
龍岩浦	十一月廿八日	二十一日遅し	十六日遅し	吳	十二月五日	五日 早し	七日 早し
仁川	十一月廿八日	十六日遅し	十一日遅し	飯田	十二月六日	二十六日遅し	七日 遅し
大連	同 日	三十六日遅し	二十日遅し	水澤	十二月十三日	四十五日遅し	三十日遅し
松本	同 日	十八日遅し	四日 遅し	佐賀	同 日	三十九日遅し	一日 遅し
會津	十一月廿九日	三十一日遅し	—	京都	同 日	三十七日遅し	七日 遅し
青島	十一月三十日	二十二日遅し	四日 早し	潮岬	同 日	十八日 六日 遅し	廿六日 早し
元山	十二月一日	二十二日遅し	四日 遅し	上海	同 日	十九日	十五日 早し